総評 2023 年 9 月分　杉本真維子

「とん、から、どん 。／／名前も知らぬ隣人の身支度／どこか心音に似て」夏鈍 律（山形県）
身支度の音という掬い方が新鮮です。さらにそこから隣人の心音を聞きとって、名前も知らない隣人自身へと一気に近づく。この一連の流れの速度にも注目しました。

「あの夏のカメラロールはやけに青／本気の自由形はきたない」汐見りら（東京都）
「本気」になっているときは気取った自意識がどこかへ行ってしまっていますので、全然かっこよくないんですね。そこを強調した「きたない」がインパクト大です。

「空港　ノ／オモチャ　売リ場　ニ／ミナミヒトコロシサソリ／ヲ　置ク／ヒッソリト」大嶋　碧月（兵庫県）
意味が伝わりにくいようにあえて選択されたカタカナ。表記によって悪意は軽量化されてもその密度は変わらない、ということも発見でした。

「白鳥・きらり／・ホワイトクリスマス／瞳の先まで月極駐車場」駒鳥朋名（埼玉県）
なぜ「月極」という二文字はこんなにも美しいのでしょう。「・」も駆使した渾身の「きらり」です。

「暮れの夏／雨がやけに力強くて／どっかの　だれかが／普通に生きてる」つけ麺（北海道）
「普通」という掴みにくい言葉が、ここでは線の太い、一つのたしかな意味になっています。「暮れの夏」や力強い雨から醸される抒情に普遍性があるからかもしれません。

「曇天が身重のようにふくらんで／何を産もうかたくらんでいる」うろ仔（北海道）
曇天のふくらみを出産と重ね合わせているところが秀逸です。また、産むという行為はたくらむこととともいえるのですね。つまり、私たちひとりひとりもたくらみですね。さあ何をしようか、とモチベーションが上がります。

「蚕ふしふしふしと不死噛み砕く」杢いう子（佐賀県）
「ふしふしふし」のいう噛み砕く音が素晴らしいです。やわらかく、噛むほどに空気がもれるような感じ。その歯ごたえをイメージしているとき、私たちはすでに「蚕」になっているのかもしれません。

「寝ている人以外は／スマホをみている／発光する地下鉄」加藤　万結子（愛知県）
揺れながら発光している地下鉄車内の美しさと危うさ、およびその二つの同居。とりわけこの電車の揺れの部分に現在性を感じました。

「水が下がる／何も言わずに／背を向けて去ってゆく／張りをなくしたガーベラの茎」桜望子（山形県）
「去ってゆく」ものは、語り手とも、「ガーベラの茎」とも読めます。動かないはずのガ

ーベラが自ら去ってゆく姿は理屈を超えて心を躍らせます。

「会社のトイレの中／破顔　破顔　破顔」静屋　はろう（東京都）
緊張がふっと解けて、あちらこちらで笑顔がこぼれている。そんな光景を思い浮かべました。笑顔とはこぼれるものなのですね。

それでは、次回も楽しみにお待ちしています。